

【 復活のトロパリ 第1調 】



きゆ うせ いしゆよ、ゆデヤのひとはかを
 救 世 主 人 墓
 ふ うじ て、へい そつなんぢのいさぎよきみを
 封 うじ て、へい 卒 爾 潔 軀
 ま も る と き、なんぢはみっかめにふくか
 守 る と き、なんぢはみっか 爾 三 日 目 復 活
 して、せかいにいのちをたまえり。
 せ 界 に 生 命 を 賜
 ゆ え にてんぐんはなんぢいのちをほどこすの
 故 天 軍 爾 生 命 施
 しゆによべり、ハリストスよ、こうえいは
 主 呼 光 榮
 なんぢのふくかつにきし、こうえいはなんぢ
 爾 復 活 歸 し、光 榮 爾
 のくににきす、ひとりひとをいつくしむ
 國 に 歸 す、ひ 獨 人 を 慈
 しゆよ、こうえいはなんぢのおもんぱかりに
 主 よ、光 榮 爾 の おもんぱ かり に
 き す。

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】



し と と ひ と し く ど う ざ な る も の、ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠

じ つ に し て し ん ち な る ハ ス ト ス の え き し ゃ 、 せ い
 實 神 智 役 者 聖

な る し ん に え ら ば れ た る ふ え 、 ハ ス ト ス の あ い
 神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う
 満 器 我 國 光

し ょ う し ゃ 、 あ し と し ゅ き ょ う せ い ニ コ ラ イ
 照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 な ん ち の ぼ く ぐ ん の た め 、 お よ び
 爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い
 全 世 界 爲 生 命 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。
 三 者 祈 給

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き
 光 榮 父 子 聖 神 歸

す 、

せ い せ い し ゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が
 成 聖 者 亜 使 徒 聖 我

く に な ん ち を た び び と お よ び い ほ う じ ん と う け
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受



しに、なんぢははじめわがくににおいておの
爾 初 我 國 お 於 お 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストの
外 來 者 知

ひかりとあたかきをながし、なんぢのて
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのこととなし、かれらにか神
屬 神 子 爲 し 彼 等 神

みのおんちようをあたえ、ハリストのきょうかいをたて
恩 寵 與 教 會 建

たり、いまこのきょうかいのためにより
今 此 教 會 の 爲 に 祈

たまえ、けだしわれらそのしよしはなん
給 蓋 我 等 其 諸 子 爾

ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
呼 我 善 牧 者 慶

べよ。

【 復活のコンダク 第1調 】



いまもいつもよよに、アミン。
今 何 時 世 世 に、アミン。

しゅさいよ、なんぢはかみなるによりてこう
主 宰 爾 神 因 光



え い の う ち に は か よ り ふ く かつ し 、 せ 世
栄 中 墓 復 活 、 世
か い を も と も に ふ く かつ せ し め た ま え り 。
界 偕 復 活 給
ひ と の せ い は なん ぢ を か み と し て ほ め う
人 性 爾 神 讃 歌
た い 、 し は ほ ろ ぼ され 、 ア ダ ム は た の し
死 滅 樂
み 、 エ ヴ ア は い ま な わ め よ り と か れ
今 縛 釋
て よ ろ こ び て よ ぶ 、 ハ ス ト ス よ 、 なん ぢ
觀 呼 爾
は しゅう じ んに ふ く かつ を た も う しゅ な り 。
衆 人 復 活 賜 主

司祭) (黙誦: 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有

となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾

り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に

痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が

聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる

もの者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の

仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈

と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖

なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) ^{けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ}
蓋 我が神よ、爾 は聖なり、我等光榮を爾 父と子と聖 神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い しん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐



司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第1調 】

司祭) つし き しゅうじん へいあん
慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) なんぢ しん
爾の神にも、

司祭) えいち
睿智、

誦經) プロキメン、第一の調、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ
たま
給え、



誦經) ぎじん しゅ ため よろこ さんえい ぎしゃ かな
義人よ、主の爲に喜べ、讚榮するは義者に適う、





誦經) ^{しゅ われらなんぢ たの}主よ、我等 爾 を頼むが如く、^{ごと}



【 アポストロス 使徒經 188 端 コリント後書 9 章 6～11 節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒パウエルがコリント人に達する後書^{じん たつ こうしょ よみ}の讀、

司祭) ^{つつし}謹みて聽くべし、^き

誦經) ^{けいてい とぼ ま もの とぼ か ゆたか ま もの ゆたか か}兄弟よ、乏しく稼く者は乏しく穡^{ひとのおのそのこころ}り、豊に稼く者は豊に穡らん。人各其心の

^{ほつ}欲する所に随^{ところ}い、^{したが}憂に由るに非ず、^{うれい}強いて爲すに非ずして^{よ あら}施すべし、^し蓋神は樂^{な あら}

^{あた}みて與うる者を愛す。且神は爾等を諸恩に富ましめんことを能す、^{もの あい}爾等常に凡の^{かつかみ なんぢら}

事^{こと}に於て足らざるなくして、^{おい}凡の善事を爲すに^た饒ならん爲なり、^{およそ}録されしが如し、^{ぜんじ}云^な

く、^{かれ}彼は散じて、^{さん}貧者に^{ひんじゃ}施せり、^{ほどこ}其義は世世に存すと。播く者に種を與え、^{そのぎ}食の爲^{よよ}

に餅を備うる者は、^{パン}願わくは^{そな}爾等が播く種を備え且殖し、^{もの}又爾等の義の實を益さんこ^{またなんぢら}

とを、^{なんぢら}爾等が凡の事に富むに由りて、^{およそ}博く施すを得ん爲なり、^{こと}此れ我等に由りて神に^と

^{たてまつ}奉る感謝を作す。^{かんしゃ}

(比較用 口語訳) 少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである。神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである。「彼は

貧しい人たちに散らして与えた。その義は永遠に続くであろう」と書いてあるとおりである。種まく人に種と食べるためのパンとを備えて下さるかたは、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そしてあなたがたの義の実を増して下さるのである。こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである。

【 アリルイヤ 主日第1調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾 に 平 安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾 の 神 にも、

司祭) ^{えいち} 睿 智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{ねが わ ため あだ かえ われ しょみん したが かみ さんしょう} 願 わくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讃 頌 せられん、



誦經) ^{おおい すくい おう ほどこ あわれみ なんぢ あぶら もの およ そのすえ よよ} 大 なる 救 を王に 施 し、 憐 を 爾 の 膏 つけられし者ダヴィド及び其裔に世世に

^{た もの われなんぢ な うた} 垂るる者よ、我 爾 の名に歌わん、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人 を 愛 する 主 宰 よ、我が 心 に 神 を 知 る 智 慧 の 浄 き 光 を 輝 か し、我が 思 念

め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ
 の目を啓きて、爾 が福音の 教 を悟らしめ給え、我が衷に 爾 の福たる 誠 を
 おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ
 畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の慾を踏み、凡そ 爾 の 喜ぶ 所
 おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
 を思い且つ 行 いて、屬 神の生活 を過ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス 神よ、
 なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
 爾 は我が 靈 と 體 との光 照 なり、我等 爾 と 爾 の無原の父と至聖至善にし
 いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
 て生命を 施 す 爾 の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書 77 端 18 章 23～35 節 】

司祭) えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん
 睿智、肅 みて立て聖福音經を聴くべし、衆 人に平安、



司祭) でん せいふくいんけい よみ
 ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) つつし き しゅ さ たとえ もう い てんこく そのしょぼく かいけい ほつ
 謹 みて聴くべし、主は左の 譬 を設けて曰えり、天國は、其 諸 僕と會 計せんと欲せ

くんおう に かいけい はじ とき いつせんまんきん おいめ もの かれ ひ きた その
 し君王に似たり。會 計を始めし時、一 千 萬 金の 債 ある者を彼に曳き來れるあり。其

つぐの あた よ しゅ かれ み そのさいし そのことごと しょう ひさ
 償 うこと能わざるに因りて、主は彼の身と、其 妻子と、其 悉 くの所 有とを鬻ぎて、

つぐの めい そのぼくふふく かれ はい い しゅ われ ゆる われことごと
 償 わんことを命ぜり。其 僕俯伏して、彼を拜して曰えり、主よ、我を寛うせよ、我 盡

なんぢ つぐの そのぼく しゅ あわれ かれ はな かれ おいめ ゆる そのぼくい
 く 爾 に 償 わん。其 僕の主は憐 みて、彼を釋ち、彼に 債 を免せり。其 僕出でて、

ひとり とお のれ ぎんいっぴやく おいめ もの あ これ とら のど し い なんぢ
 一人の同僚の、己 に銀 一 百 の 債 ある者に遇いて、之を執え、喉を扼めて曰えり、 爾

お ところ われ つぐの そのともかれ そくか ふふく もと い われ ゆる われ
 が負う 所 を我に 償 え。其同僚彼の足下に俯伏して、求めて曰えり、我を寛うせよ、我

ことごと なんぢ つぐの しか かれうけが すなわちゆ そのおいめ つぐの いた
 尽 く 爾 に 償 わん。然れども、彼 肯 わず、乃 往きて、其 債 を 償 うに至るまで、

これ ひとや くだ た とおこれ み はなはだうれ きた あ ところ ことごと しゅ つ
 之を 獄 に下せり。佗の同僚之を見て、甚 憂い、來りて有りし 所 を 悉 く主に告げ

そのときしゅ かれ め いわ あ ぼく なんぢわれ もと よ われそのおいめ
 たり。其 時 主は彼を召して曰く、惡しき僕よ、 爾 我に求めしに因りて、我 其 債 を

ことごと なんぢ ゆる わ なんぢ あわれ ごと なんぢ またなんぢ とも あわれ あら
 悉く爾に免せり、我が爾を憐みし如く、爾も亦爾の同僚を憐むべきに非ず
 や。主 乃 怒りて、其 悉くの債を償うに至るまで、彼を獄吏に付せり。若し 爾
 等 各 其心より己の兄弟に其罪を免さずば、我が天の父も亦斯くの如く 爾等に
 おこな
 行わん。

(比較用 口語訳) 天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。決算が始まると、一万タラントの負債のある者が、王のところに連れられてきた。しかし、返せなかったので、主人は、その人自身とその妻子と持ち物全部とを売って返すように命じた。そこで、この僕はひれ伏して哀願した、『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。その僕が出て行くと、百デナリを貸しているひとりの仲間に出会い、彼をつかまえ、首をしめて『借金を返せ』と言った。そこでこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってくれ。返すから』と言って頼んだ。しかし承知せずに、その人をひっぱって行って、借金を返すまで獄に入れた。その人の仲間たちは、この様子を見て、非常に心をいため、行ってそのことをのこらず主人に話した。そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、わたしに願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわたした。あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※ 聖体礼儀③ (金ロイオアン) へ